

# 藤本能道の色絵磁器

## 釉描加彩



私の今の仕事は、  
どこか(行く)過程であつて  
これで完成したとは思ってはない。  
これを磁器の模様として  
完全なある姿にしてしまわないと。  
……藤本能道

### ●工程



釉彩(釉描)



ほんがま  
本窯



本焼き後

●規格—33分・カラー  
16ミリ/210,000円  
VTR/55,000円

文部省特選

●企画—(財)ポーラ伝統文化  
振興財団

●製作—株式会社桜映画社

●監修—東京国立博物館資料部長

林屋晴三

東京国立近代美術館工芸課長

長谷部満彦

●協力—藤本能道の弟子

末岡信彦

広瀬義之

橋詰正秀

東京国立近代美術館

石川県立美術館 他

### ●スタッフ

製作—村山和雄

脚本・監督—村山正実

撮影—村山和雄

照明—水村富雄

編集—沼崎梅子

音楽—長沢勝俊

録音—福島音響効果

解説—幸田弘子



上絵

(加彩)

にしがま  
錦窯



完成



草白釉 釉描金彩椿刷鷓鴣 八角面取壺

### ●配給



## ●—藤本能道と色絵磁器

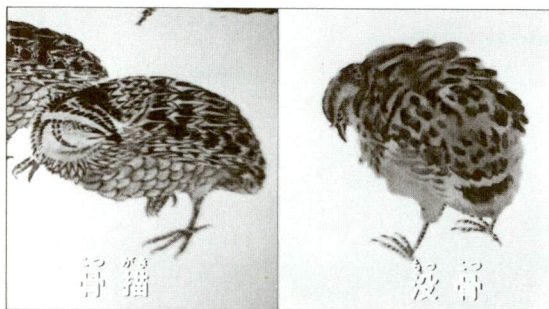
東京国立博物館資料部長 林屋晴三

我が国で、色絵磁器が生産されるようになったのは、江戸時代、17世紀の中葉、有田において、初代柿右衛門が始めたといわれ、それまでの陶芸技術の多くがそうであったように、上絵付けの技法も中国人から習得したものであった。その後、有田を中心に、各地で生産されるようになり、古伊万里、古九谷と称される色絵磁器が、今なお声価が高い。

近・現代の色絵磁器は、当然そうした流れをうけているが、しかし、地域的な生産の他には、個人的な作家によって、個性的な芸術的表現を、求めて行なわれるようになり、そうしたなかにおいて、富本憲吉、加藤土師萌の二人は、日本だけではなく、中国を中心とする東洋の色絵の伝統を、技術的に探究しつつ、それぞれに一風ある色絵を展開した。

藤本能道氏は、富本、加藤両氏に師事して、色絵の世界に入り、写生に立脚した絵画的な色絵の表現を研鑽、独自の芸風を模索しつつ今に至っている。特に近年、過去の色絵にはなかった釉下彩を加えた色絵の技法を、新しく創案し、その絵画的表現の上に厚味を加えたことは、注目されている。

しかも、作者は、なお究極的な何かを求めての過程として今を捉え、東京芸術大学学長という重職を果たしつつ、現代の色絵磁器のありかたを真摯に追っている姿は立派である。



骨描 輪郭を線描きする  
伝統的な描法

没骨 輪郭を線描きせず  
ぼかすように描く技法

### 【色絵磁器の歴史】

#### ◎中国◎

- 1201—磁州窯系の窯で色絵（宋赤絵）が焼造される。
- 1470—この頃より五彩磁器製造が安定。
- 1541—景德鎮民窯で五彩金襷手を焼造。

#### ◎日本◎

- 1616—李參平が佐賀県有田町泉山に白磁磁を発見し磁器焼成に成功。
- 1643—初代柿右衛門有田で始めて色絵磁器を完成。（説）大聖寺藩主前田利治、田村権左衛門に命じ九谷窯を開かせた。（説）
- 1647—この頃野々村仁清京都仁和寺に築窯。（説）
- 1663—尾形乾山生まれる。
- 1671—この頃古九谷様式の色絵磁器が焼かれ始めた。（説）
- 1699—尾形乾山鳴滝に乾山窯完成。
- 1738—初代清水六兵衛生まれる。
- 1758—奥田穎川生まれる。
- 1767—青木木米生まれる。
- 1955—富本憲吉、重要無形文化財保持者に認定。
- 1961—加藤土師萌、重要無形文化財保持者に認定。
- 1971—柿右衛門製陶技術保存会、色鍋島今右衛門技術保存会が重要無形文化財総合指定を受ける。
- 1986—藤本能道、重要無形文化財保持者に認定。



草白釉 釉描金彩木の葉ずく文 四角大筥

## ●—あらすじ

色絵磁器の作家、藤本能道が奥多摩の青梅に工房を持ったのは、昭和48年、54歳のときである。

家の前を流れる多摩川は写生のかっこうの場で、彼は、この恵まれた自然の中から四季折々の鳥や花を主題に、さまざまな作品を作ってきた。自然のものを自分の目で見て写生して、自分が納得したものを模倣化していくことを説いたのは、彼の師の富本憲吉である。富本のこの教えは、藤本の色絵の出発点であった。しかし、藤本は、この教えを守りながらも、一方でその強い影響から脱け出そうと、一時は色絵磁器からはなれてオブジェ陶芸にも走った。

藤本が、再び色絵磁器の制作に戻ったときは、すでに50歳に近かった。彼の色絵磁器の技法は、富本から教えを受けた加賀の九谷の技法を受け継いだものだが、色絵磁器は、もともと中国の明時代に技術的に完成されたといわれていたものである。藤本は、この伝統的な技法に、新しさを加えてみようと考えた。

彼の技法が大きく変化し始めたのは、50代も終り頃であった。色絵の上絵付けに、伝統技法の一つである「骨描」と呼ばれる輪郭を線描きする方法をやめて、線を描かずにはぼかすように色絵付けする「没骨描法」という技法をとり入れたのである。

さらに、何度もテストを試みるうちに、混ぜ合わせてはいけないとされていた五彩の絵具から、中間色をつくることに成功した。木の葉の微妙な色合い、鳥の羽毛の柔かい表現——この没骨描法と中間色によって藤本は、伝統的な五彩から抜け出してより写実的な表現を可能にした。

やがて、藤本が「釉描加彩」と名付けた新しい色絵の技法を生み出したのは、彼が65歳を過ぎてからであった。これは、まず色のある釉薬で絵付けをして、高温で本焼きし、次の上絵付けで色絵具で再度絵を描き、低温で焼きつけるという技法で、それは長い試行錯誤の末の彼の色絵の集大成でもあった。この「釉描加彩」によって、複雑微妙な色調、立体感、奥行き表現など、新しい色絵磁器の世界を可能にしたのだ。

しかし、藤本能道の色絵磁器への模索と探索は、いまだ終ってはいない。

### 【藤本能道略歴】

- 1919年—東京で生まれる。
- 1941年—東京美術学校工芸科图案部卒業。文部省工芸技術講習所に入所。富本憲吉、加藤土師萌に師事する。
- 1963年—日本伝統工芸展入選。以後、連続入選。
- 1966年—日本工芸会の正式会員となる。
- 1973年—東京都青梅市梅郷に築窯。
- 1985年—東京芸術大学学長に就任する。
- 1986年—重要無形文化財保持者（人間国宝）に認定される。